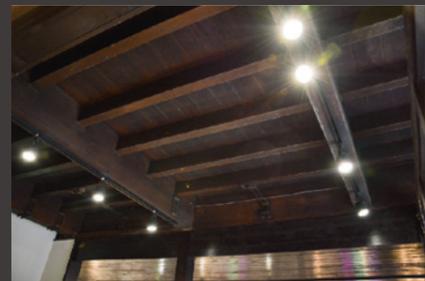


おたる・しりべしの魅力を発掘する 小樽商科大学



1階。かつては玄関の北側に事務室、南側に旧応接室の洋間があった。



1階の天井。建築当時の雰囲気がこのころ。



2階。かつて建物正面側に12.5畳間の和室が2室並んでいた。



建物南側の下部にはレンガが使用されている。



階段。親柱が八角形、らせん状で、2階の手すりの曲面など意匠が秀逸。

旧広海二三郎商店
(小樽市堺町 5-33)
明治44年以前に広海二三郎商店として建築。木骨石造2階建て。正面の窓は1階と2階の位置が異なっていることが特徴。かつて、玄関の北側に事務室、南側に旧応接室の洋間があり、玄関ホール天井は2階の床組みが露出していた。2階には和室が4室あり、正面側に12.5畳間の2室が並び、その境には井桁に透かし彫りの箴欄間と襖、北側の壁面に座敷飾りの床と違棚があった。昭和23年、白石工業株式会社の所有となる。52年、臨港線まであった倉庫と浴室棟を解体。西向き正面の両脇にうだつと建てるが、その後、うだつの屋根部分は撤去。平成17年4月、おたる瑠璃工房となる。



入口上部には幾何学的な装飾が施されている。



金庫。1階に置かれている。



建物東側の外観。蔦でびっしり覆われている。



建物南側には梯子が設置されている。

【参考文献】佐々木誠治「日本海運業の近代化」(1961年)、「広海家と海運業」(北前船の里資料館特別展パンフレット、1989年)、「小樽市の歴史的建造物」(1994年)
【謝辞】おたる瑠璃工房スタッフ、中村江里さん(株式会社オルゴール堂)にご協力いただきました。感謝申し上げます。



旧広海二三郎商店 (おたる瑠璃工房)

加賀の北前船主・広海家の小樽での拠点、小樽支店

小樽と北前船の深い関わりは古くから知られているが、今年(平成30年)5月、小樽市が「北前船」の日本遺産に追加認定されたことで、あらためて注目されている。小樽を代表する観光地、堺町通りはかつて問屋街であり、北前船でもたらされる物資が取引された場所。様々な北前船の遺産がこのころ。この建物は、住吉神社の第一鳥居を大家七平と共に寄進したところ、北浜地区の旧広海倉庫で知られる加賀の北前船主・広海二三郎家の小樽支店である。

広海家が海運業を始めたのは戦国時代の文禄2(1593)年に遡り、天保以前に瀬越村(現在の石川県加賀市)に移ったと推定されている。瀬越村は北前船主集落で、小樽に大家倉庫をつくった大家家の出身地でもある。

広海家が北海道に進出していったのは中興の祖といわれる初代八右衛門の頃である。初代八右衛門は約400石積の広徳丸で北海道沿岸を探検し、1750年代以降、大阪と蝦夷地(北海道)間の北前交易を活発に行うようになった。

小樽で活躍した五世二三郎(1854・1929)は、明治2(1869)年、16歳で営業見習として同家支配人の下に預けられ、大阪と小樽で修行をつんだ。広海家が小樽に支店を設置したのは20歳の時といわれる。同12年、五世二三郎の強い要望で広海家は初め

て西洋型帆船・経基丸を購入した。同20年に家督を相続した時、持ち船は和船7隻、西洋型帆船4隻となっている。

翌21年には父の反対を押し切って、英国製の600トンの汽船・エヌモルダ号を購入。広海家は本格的に汽船に転換していった。小樽の北浜地区に広海倉庫を建造したのはその翌年である。江戸期以来の和船での買い積みによる北前交易から、蒸気船で他者の荷物を運送する近代的海運業への転換は五世二三郎の決断による。

同29年、東京海上火災保険会社が北前船主に不親切だったことに反発し、日本海上火災保険会社を創設し、初代社長に就任した。明治30年代前後から筑前の炭鉱経営を手がけるなど多角経営を展開していった。同39年には大阪本店が汽船での運送業のみとなり、小樽支店は物品販売業の担当となった。大阪本店と小樽支店の関係は不明な点が多いが、小樽支店では伝統的な北前船主の物品販売業を継続していたことは興味深い。同41年、広海商事株式会社を設立し、広海家は個人経営から会社経営となった。

この建物は、最も長期間、海運業を営んでいた北前船主家の一つ、広海家の活躍をいまに伝える貴重な遺産である。

撮影: 菱合亮・禹潼(小樽商科大学写真部)
文章: 高野宏康(小樽商科大学学術研究員)

小樽れっけん

